

# 第16章 個と公の調和を求めて

## 1999—2001

### 戦後最悪の不況に直面

絶頂の80年代、転落の90年代——。その90年代も最後の年を迎えた。昨98年10月9日、株式市場は12,879.97をつけるなど、戦後最悪の不況が日本列島を直撃していた。10月から12月にかけて、1999年度会頭予定者松山政司（福岡）は地区対話集会で全国を飛び回った。現地の声は「深刻な不況でJCどころじゃない」、「会員数が減少している」、「倒産も出始めた」など状況は深刻化していた。金融機関の「貸し渋り」は企業活動を阻害し、まさに経済・産業界は厳冬の季節だった。

この状況は正副会頭会議で報告され、直ちに「全国会員に対する不況対策緊急アンケート1」の実施（12/16～1/15）が決まった。事業予算は、既にゼロ。手弁当で、6036名の生の声を集めることになった。

### 貸し渋り緊急対策など、緊急提言

1999年1月21日早朝、京都は粉雪が舞った。松山会頭はじめ役員団は、会頭記者懇談会で新聞・テレビなどマスコミ13社に、本年度の活動方針を説明。特に、アンケート調査に基づく「不況対策緊急提言」に質問が続出した。

京都会議3日目の23日、政治経済・教育・行政（地方分権）の3部構成によるメインフォーラムの開始に先立ち、田守順副会頭（帯広）が「不況対策緊急提言」を発表した。提言は、同フォーラムの講師である野中広務官房長官、樋口廣太郎経済戦略会議議長に手渡され、両氏はそれぞれ閣議、戦略会議で討議すると確約した。提言は次の10項目。

●政府への緊急提言＝①保証協会の特別保証制度を悪用した資金回収に対する監視強化。②中小企業融資を中心としている信用金庫への資本注入実施。③中小・中堅企業向けの直接金融市場（株式・債券市場）の育成。④BIS基準8%の見直し。

●銀行への緊急提言＝⑤バブル期の銀行役員の総退陣。⑥「銀行取引約定書」など、貸し手である銀

行の立場を利用した専横的な取引慣行の見直し。⑦海外業務取扱い銀行の絞り込み。

●JCからの緊急発信＝⑧中小企業の銀行離れに対する警告。⑨「銀行サポーター運動（仮称）」の提唱。⑩貸し渋り銀行ワースト5の発表。

提言は、「貸し渋り銀行ワースト5」の記事を中心に朝日、産経の全国紙はじめ25紙で報道された。

### 戦後最悪の不況、いかに乗り切るか

フォーラム第1部のテーマは、ずばり「戦後最悪の不況をどう乗り越え、日本経済が元気を取り戻すにはどうすればいいのか」だ。

野中官房長官は「経済における国家存亡の危機にあり、金融機関の認識不足を糾す努力を続ける必要がある。また、日本経済の基盤を支えているのは中小企業であり、地域においてJCの若い力で元気を注いでほしい」と要請。

樋口議長は「G7の中で開業率が廃業率を下回っているのは日本だけ。これでは経済が伸びるわけではない。最大の問題だ。他国では50歳を過ぎても積極的に起業しており、40歳以下のJCにできないわけではない。逆境こそチャンス」と激励された。

### 日本は動く、その小さな勇気から

24日、松山会頭の所信表明である。

「私は重大な決断をしようとする時、鹿児島県の知覧特攻平和館に行く。特攻隊員の御霊を祭り、遺品が集められている。平和は数多くの、かけがえのない青春の上に築かれていることを忘れ、自分の利害だけで権利ばかり主張し、責任を果たさなくなっていることを恥じなくてはならない。日本のために、誰かがでなく、自ら動き出さなければならない。

昨年12月、下関市吉田町に高杉晋作が眠る東行庵を訪ねた。高杉は長州藩のエネルギーを日本の未来のため倒幕にかけようと、たった一人で兵を挙げ、僅か80名で2000名もの相手に戦いを挑み快進撃を見せた。研ぎ澄まされた感性で時代を的確に読み、今が勝負と思えば身命を投げ打って動く。私は、高



杉のこんな所に強烈に惹かれる。

特攻隊や高杉晋作の話で、玉砕精神を美化しようとする気持ちは全くない。お伝えしたいのは心意気と行動だ。今、JCは必ず動くべき時、私はそう考え、そう信じている。高杉の墓前に手を合わせ、会頭として一年間、みずから動き必死で頑張ることを誓ってきた。

たった一人きりだった高杉に比べ、私には全国に6万人もの仲間がいる。100名を超える国会議員、1900名を超える地方議員、そして多くの首長を輩出しているJC、全国約35,000の小・中学校のPTAを通じて教育にかかわっているJC、JCIを通じて100を超える国と地域、30数万というネットワーク、NPOの草分けとも言えるJC、そして何と言っても若いJC、こんなJCが動き始めれば地域は、日本は、時代は動かないはずはない。

そんな思いを伝えていくことが、私の会頭としての役目だ。だから、私は動く。そのちょっとした思い切りから、その小さな勇気から、私達の地域は、日本は必ず動く」。

## 動く松山会頭、北から南へ

1月30～31日、動く松山会頭の公式訪問が始まった。まず、日本で一番早く太陽が昇る地域、北海道は中川郡幕別町で開催された道東ブロックの「ウィンターコンファレンス in 十勝」だ。山本英明道東ブロック会長(帯広)、佐直範繁帯広理事長はじめ多数のメンバーが集まった。会頭は「自らをコア世代

と呼ぶ我々が、本気で動けば日本は必ず変わる。今のJCは、まだまだ本気になっていない」と、行動を喚起した。

2月10日、九州は田川市福寿会館に姿を現わす。福岡ブロック協議会に併せての会頭訪問だ。由地俊広九州地区担当常任理事(日南)、池上秀一福岡ブロック会長(北九州)はじめブロック内21LOMから約300名の出席だ。

会頭は、青年が本気で動かなければ世の中は決して変化しないという、自身の体験を交えながらアピールした。懇親会では一人ひとりと握手を交わし、親交を深めた。

### 自ら犠牲になる気持ちで

西座聖樹理事長(田川)は「小さなまちでは、動きだすことに様々な障害がある。しかし、自らが率先してやるという勇気をもたなければ、まちを変えていくことはできない。今日はLOMメンバーのほとんどが参加しており、会頭の話聞いて自分だけが生き延びようとするのではなく、自分から犠牲になるという気持ちをもってくれたと思う。その思いを胸に一年間、動いていきたい」と語った。

## 「ダイオキシン測定問題」で、緊急提言

3月4日、松山会頭は埼玉県庁に土屋義彦知事を訪ね、ダイオキシン測定問題等について会談した。問題は「所沢市産の野菜から高い濃度のダイオキシンが検出された」とのテレビ報道を発火点に、同市産の野菜が大幅に下落したことから始った。後に誤

報と判明したが、所沢産野菜の販売中止という事態に発展した2月11日、冷たい雪が降りしきる中を所沢JCのメンバーは「野菜の不買をしても、何の問題解決にもならない。日本のゴミが減らない限り、ダイオキシン問題の本当の解決にはならない」と、所沢駅前でチラシ配付とハウレンソウの無料配布をし



松山会頭公式訪問('98)





ダイオキシン問題（'99）

て問題提起を行なった。3月1日、隣接の飯能JCと共に飯能駅前と高麗駅前でも実施した。

#### 5日間で調査、緊急提言へ！

報告を受けた日本JCは、ダイオキシンの問題は所沢だけの問題ではないと判断し、全国750LOMのネットワークを生かし2月24日から3月1日まで、各地の大規模ごみ処理場の操業形態やダイオキシン等の数値の情報開示の実態などについて「所沢産野菜のダイオキシン測定問題に関する緊急アンケート」を実施し、それに基づく緊急提言を発表した。

なんと、5日間という短時日に全国449の市町村で実態調査を完了し、「緊急提言（対政府・地域行政・市民・報道機関）」、並びに「JCからの緊急発信」を発表したのだ。まさに、「動く」と言うべきか。

提言を記述する紙幅はないが、JCからの緊急発信を紹介しておく。「全国のメンバー6万社は、それぞれの分野で環境問題解決に関わる新商品開発を行なう。日本JCは全国750の地域で、子供達だけでなく大人の啓蒙を含め環境教育運動を進めていく。JCIのネットワークを使い、アジア地域の環境観測ネットワークを設立する」。JCは政府、地域行政、市民、報道機関に注文するだけでなく、自分達も汗をかく行動計画の発信を忘れなかった。アジアでのネットワーク設立など、スケールの大きい事業も構想されている。

#### 土屋知事、JCの取り組みを評価

土屋知事との会談だが、松山会頭は「ダイオキシ

ン問題は特別の地域で起こっているのではない。地球のあちこちで悲鳴を上げている。この所沢での小さな動きを、やがて全国に、そして地球全体に広げて問題解決に努力したい」と述べたのに対し、土屋知事はJCのダイオキシン問題への取り組みを高く評価し、1996年度から実施している埼玉県独自のダイオキシン問題の取り組みの概要や、今回の問題に対する県の対応について、説明された。

横山正所沢JC理事長は土屋知事に、県のダイオキシン対策費の一助にと、10万円を手渡した。先の所沢駅前でハウレンソウ1600束を無料配付した際、市民から寄せられた募金4万4534円に、県内のJCメンバーが上乘せしたものであった。

#### 追加景気対策、 税制改革緊急提言を連打

5月20日、年初の「不況対策緊急アンケート1」に続き、「同アンケート2」を実施し、政府に対する「追加景気対策」と「経済再生のための税制改革」の緊急提言をまとめ、松山会頭から小淵首相に手渡した。今回の提言はメンバー2万8399名の声を集計したもので、翌21日に記者会見で発表した。

更に6月5日、経団連会館において「日本を動かせ 不況対策緊急討論会」と題する円卓会議を開催。堺屋太一経済企画庁長官の基調講演に続き、有力政財界人、マスコミ関係者らと共に熱い議論を交わし、緊急提言を強くアピールした。読売、産経、日経はじめ全国各紙、並びにフジテレビで報道された。提言は、以下の通り。

●「追加景気対策に関する緊急提言（本年度）」＝  
①5兆円規模の情報インフラ中心型の公共事業投資の追加。  
②10兆円の保証協会の特別保証枠の追加（審査基準の強化）。

●「経済再生のための税制改革緊急提言（3年後より実施）」＝  
①所得税の最高税率を40%に引き下げ。  
②所得税の最低課税限度額を年収200万円に引き下げ。  
③法人税の実効税率を40%に引き下げ。  
④相



統税の最高税率を40%に引き下げ(事業用地に関する評価は農地なみに引き下げ)。⑤4年後には所得税の最高税率、法人税の実効税率、相続税の最高税率を、それぞれ30%に引き下げ。⑥5年後には所得税の最高税率、法人税の実効税率、相続税の最高税率を、それぞれ20%に引き下げ。⑦財源として消費税の段階的引き上げ(最終的に10%)と遊休地の固定資産税引き上げ。

### 中小企業国会に向け緊急提言

緊急提言は、秋の臨時国会(中小企業国会)に向け各党の政策責任者に提出。11月4日には松山会頭、田守副会頭らが自民党本部に亀井静香政調会長を訪ねた。亀井政調会長は、「これだけ全国の中小企業経営者の生の声を集めたアンケートはこれまでなかった」と述べ、改めて会頭と突っ込んだ対話をしたいと希望され、後日、実現の運びとなり『We Believe』11月号に掲載された(以下、抜粋)。

**亀井** 提言は、しっかり拝見した。法人税の実効税率と所得税の最高税率引き下げのシミュレーションは、歳入・歳出のバランスは問題ないんじゃないか。相続税の廃止は、過重負担のため事業承継できないとすれば、思い切った改革に着手する必要がある。

それから、お聞きしたいのだが、アンケートに答えた約8割が規制改革に賛成というが、ここ10年くらい規制緩和と称して弱者を強者から守る、小を大から守る、そういうものまで嵐にさらしてしまった。JCで対象になる業種の方は本当に困らないのか、業種別部会が39あるそうだが、業種ごとに規制改革に対するご意見を頂けると非常に参考になる。

**松山** メンバーが規制改革を前向きに捉えているのは、起業に対する意欲と考える。確かに、規制改革を正しく進めていくためにも、業種別部会を有する組織として、具体的意見を取りまとめてご報告させて頂く。

**亀井** 期待している。中心市街地の活性化についても提言されているが、本当に今、全国の商店街は悲鳴をあげている。決して、スーパーが悪いとは言わな

いが、効率だけの世界が果たして人間にとって幸せなんだろうか。JCの皆さんには、どうすれば商店街を活性化できるのか、全国からの声を具体的に聞かせてほしい。皆さんは、儲かればいいという発想ではなく、地域社会に対して責任をもつ、という意識をもっておられる。それを大事にして、祭りなど地域の伝統文化の担い手として活躍してほしい。いつか、自分の商売に返ってくるんじゃないか。

この対談で、改めて亀井政調会長のJCへの評価・期待が高いことを確認させられた。

### 「心の教育」と取り組む

連日のように、青少年の犯罪が報道されている。不登校、いじめの問題、学級崩壊などに関連し学校教育の在り方も問われている。この状況下、日本JCは1999年度の最重要テーマの一つに「心の教育」を取り上げた。まさに、必須のテーマだ。「心の教育」創造実践会議の完賀浩光議長(土浦)は「教育は、必ず変えることができる。教育が変われば、日本の未来も変わると確信する。本年、当会議体は常に心の汗をかき続け、ひたすら動く。未来を創造していく主体でありたい」と語る。熱い声援をおくりたい。

### 福井JCマン、教壇に立つ

JC PRESS 8月号に「公立中学校の教壇に立とう! ~福井JCの取り組み~」という報告が載っていた。「全てを学校教育者に依存し、家庭での教育が空洞化しているのではないか。地域人、家庭人として学校と隔たるのではなく、むしろ我々一人ひとりが教壇に立ち、教育の現場に参加してゆくことも必要ではないだろうか。地域の先生を育成していくことは、我々青年経済人が担うべきことであり、今すぐ始めなければならないことではないか」。この問題意識で、福井JC(揚原安磨理事長)「心づくり委員会」の事業が紹介されていた。

「偏差値重視に陥りがちな学校教育の中で、生徒自身が自分の将来を意識し、普段の学習目的を確認



してもらおう、という発想だ。進路学習の一環として「職業別選択講座」を開講し、JCメンバーが教壇に立ち生徒の進路アドバイザーになる。メンバー以外の一般企業からも約20名、20業種の現場で働く者が教壇に立つ。生徒は興味のある業種を自由選択し、1回2時間の学習を受ける。授業は単なる職業紹介にとどまらず、その職業に携わる人の熱意や情熱を伝える。社会人から子供達へ、夢や思いを社会教育の立場から伝える」と、西村友一(福井)の報告にあった。

#### 横浜JCの寺子屋

10月、山形全国大会のセミナーに「心の教育」シンポジウムが登場した。「これでいいのか日本の歴史」をテーマに西部邁先生の基調講演で「歴史の中の誰もが認める平凡な真実こそ、自由と秩序のバランスをとるポイントであり、人としての当たり前の価値観を与えてくれる」という指摘に、歴史の本質と、心の教育の根っこを見る思いがした、と報告されている。

歴史教育も大事な事業だ。旧聞に属するが、横浜JCでは97年に「横浜寺子屋」を実施していた。間宮茂理事長(当時)は、次のように記している(要旨)。

「私達が、しっかりとした自国の歴史観と世界観をもつことが、子供達に一番大きな教育になる。一部のマスコミや進歩的文化人と称される人達の間違った歴史観を信じてはいけない。そこで、横浜JCの地球市民室・地球の子供達委員会では、子供達が歴史に興味をもってもらうため「横浜寺子屋」を実施した。

横浜の歴史は幕末からなので、まず江戸後期の人物・二宮尊徳を学ぶ。ペリー来航の場所でペリー上陸記念碑、記念艦・三笠を見学し時代考証する。横浜開港記念日には咸臨丸に乗船し勝海舟を学び、坂本龍馬を題材に当時、西欧の植民地化を阻止するため、どんな思いで日本という国を考えていたか学ぶ。最後に、親子歴史討論会を開催する」。

#### 99サマコン、市民主役の新時代!

7月24～25日、パシフィコ横浜はサマーコンファレンス。テーマは「動き出した日本 市民が主役の新時代!」。JCメンバー9010名の登録と、4000名超の市民が参加した。ブースは130団体からの出展で、連日、賑わった。NPO団体の参加も、昨年を上回る45団体である。

メインフォーラムで松山会頭は「1万1000人以上のメンバーと握手を交わした公式訪問を通じ、地域は決して閉塞感だけにとらわれず、熱い勇気をもって行動していることを実感した」と述べた後、参加者に対し「今年JCが行なっている活動を確認し、自信と勇気をもち帰ってほしい」と訴えた。

#### 石原慎太郎、日本の可能性を語る

基調講演は石原慎太郎氏。テーマは「日本の可能性」。「今日は都知事ではなく、作家として話したい」と前置きした石原氏は、次のように語った。「日本の現状について悲観するのは無理ないが、現在の不況だけを見て日本を見限ってはならない。悲観論に傾く日本の知識人もいるが、外国には日本の可能性を認めている識者もいる。若い人、とくにJCのようにリーダーたらんとする人は、日本が近代世界史に与えた影響を、もっと勉強すべきだ。気負う必要はないが、もっと自分の国に誇りを持ち、ノーと言うべき時は言える日本であってほしい」。

#### TOYPグランプリ、長有紀枝さん

99TOYP大賞の授賞記念式典にも、多数の市民が集まった。受賞者が地球を舞台に様々な分野で活動する紹介ビデオや、率直な受賞の言葉は、参加者に大きな勇気を与えた。

今年は長有紀枝さん(春日部JC推薦)がグランプリ外務大臣奨励賞を受賞。活動分野は国際協力。長さんはNGO「難民を助ける会」のメンバーとしてコソボ紛争に赴き、援助の空白地帯のセルビア系難民の支援を行なった。また、日本人の関心が薄かった対人地雷廃絶運動では、その恐ろしさと悲惨さを根気強く訴え、小淵首相を対人地雷全面禁止条約締結



に導くなど、国境を越えた地球益のための活動を続けている。

さて、真夏のイベントは全て終了し、参加者はエンディングセレモニー会場に集まってくる。そして、サマコンで得た成果を地域に持ち帰り、明日からの運動に活かすことを確認し、小さな勇気をもって動き続けよう、と決意を胸に会場を後にした。少女達の奏でる美しいベルの音、それは新しいミレニアムへの序曲のように、いつまでも響いていた。

## 外国語の声援飛び交う、地球市民の日

8月8日、「第2回・地球市民の日」を迎え、各地で様々な活動が展開された。日本JCは、「2002年サッカーワールドカップ決勝戦」の会場に決定した横浜国際総合競技場を舞台に、フェスティバルの開催だ。日本と韓国の少年チームを中心に「ジュニアサッカー大会」、日韓両国・往年の名選手による「日韓代表OB戦」、そして「Kiroroのミニコンサート」が主なプログラムである。

猛暑の中、スタンドでは日本語、ハングル語、英語、ポルトガル語などが飛び交い、さながら会場は地球市民のイベントにふさわしい雰囲気包まれていた。

ジュニアサッカー大会には全国、そして韓国から13の少年チームが出場し、当日の国際総合競技場では横浜市選抜対ソウル選抜の決勝戦と日韓選抜選手

によるエキシビジョンマッチが行なわれた。子供達は、試合だけでなくサッカークリニック、懇親会などで交流の時間を共有し、お互いの文化に触れ合った。

そして、グランドフィナーレ。Kiroroのミニコンサートは、フェスティバルのイメージソング『僕らはヒーロー』で、一人ひとりが主人公となって、いつまでも輝いていこう、と歌い上げ、99年8月8日「地球市民の日」はフィナーレとなった。

### 少女達のつぶやき

「帰途、10代の少女達が『地球市民って何だか知らなかったけど、一人ひとりがもっと思いやりの心をもとうということだったら、いいよね』と話しているのを耳にし、8月8日を地球市民の日として、広く国民全体が地球市民意識をもてるようにしたいというJCの思いが、一歩前進したように感じた」と、日本JC広報渉外特別委員長富沢克司(大和)は、8月8日の報告記を結んでいた。琴線に触れる、胸が痛むような感動を覚える一文である。

## 北方領土、返還を求めて30年

日本JCが北方領土返還運動を始めて30年を迎えた。単年度制のJC運動が、30年にわたって継続した単一事業は例を見ないのではないか。北方領土問題は日本民族の魂からの叫びであり、それを支え続けてきたJC運動は、称賛されるべきものと思う。

第30次「北方領土返還現地大会」に先立ち、5月9～16日の日程で北方領土・CIS関係委員会主催による総勢50名以上の「ロシア、ウズベキミッション」が現地訪問した。

松山会頭を団長とするロシアミッションには、衆議院議員・1984年度会頭齊藤斗志二(富士)が名誉団長として加わり、ロシア要人との会談を行なった。日ロ友好団体の21世紀委員会副議長ロパーチン議員は「ロシアでは70%の国民が日本に好意をもっているのに、日本では4%しかロシアに好意をもっていない(朝日新聞調査)。この国民感情を解決しない限り、北方領土問題は前進しない」と、このJC交流プログ



「地球市民の日」シンボルマーク

地球市民の日シンボルマーク





ウズベキスタンミッション（'99）

ラムのような民間外交の重要性を示唆した。カラーシン外務次官は「ビザなし交流や漁業協力など、北方四島解決の作業は進んでいる。今後の日ロ関係は、各分野において一層の協力が必要」と、民間交流促進の意義を述べた。

他方、土屋龍一郎グローバルネットワーク室長（長野）を団長とするウズベキスタンミッションは、ウズベキスタンJCのJCI正式加盟のためのサポートや、ビジネス講演会など共同事業を通じて、より親密な友好関係の樹立を図った。

#### 日・ロの子供達の言葉

7月31～8月1日、第30次現地大会は根室市で行なわれた。初日、根室総合文化会館の現地大会と東京JA会館を2元中継で結び、より幅広い国民運動を展開した。渡部昇一上智大学教授の「法と正義に基づいた領土返還」についての基調講演に続き、パネルディスカッション「心のふるさと北方」が行なわれた。北方領土で生まれた児玉泰子さんは「日本側から返せ返せと言うのではなく、ロシア側から返すという雰囲気をもっていくのがベスト。現実に島民がいるのだから、彼等の権利も尊重した上での返還でなくては実現しないのではないか」と発言、印象に残った。両会場で、21世紀初頭の返還を願って締め括られた。

1日、根室市納沙布岬では第30次モニュメントの除幕式などが行なわれた。札幌在住のロシアの子供と根室の子供達による、それぞれの国に対す

る作文の朗読があり、「お互い隣国として仲良くしよう」という子供達の言葉に、日ロ友好新時代の間近さを感じた。

#### 野津喬元会頭、 中国政府より「国家友誼賞」

建国50周年の中国では、国慶節の祝典が盛大に実施された。9月29日には、中国政府が外国人に贈る最高の榮譽賞「国家友誼賞」の授与式が行なわれ、日本JC「日中友好の会」名誉会長の野津喬34代会頭（岡山）が受賞した。同賞は社会発展、経済、科学技術、文化教育、人材育成などの事業に特別な貢献をした外国人に贈られるもので、世界から100人が選ばれ日本では19人が受賞。野津名誉会長は次のように語った。

「最高の賞を頂き光栄です。民間外交こそ最大の安全保障で、同じ漢字圏の日本と中国が仲良くすることがアジアの平和につながると思い、活動してきました。その基はJCの理念であり、長く活動できたのもJCの支援と感謝している。今後とも、JCと共に日中友好のため頑張りたい」。

#### トルコ大地震! 緊急支援調査活動へ

8月17日午前3時1分、トルコ北西部でマグニチュード7.4の大地震が発生。死者、負傷者の人的被害を含め未曾有の被害をもたらした。発生後、半月近く経っても被害の全容は掴めない。阪神・淡路大震災の記憶も生々しい日本からは様々な支援活動が始まっており、日本JCとしても松山会頭、五十嵐信JCI副会頭らを中心とする緊急支援調査団が現地へ赴いた。

29日午前1時30分、調査団は医薬品と義援金（日本JC 1万ドルと山形JC1000ドル）を携え、イスタンブール空港に到着。早速、医薬品をトルコ保健健康省に手渡した。30日、トルコJCと協力して復興活動を行なうコーチ社を訪問。松山会頭は阪神・淡路大震災支援の経験から、市民と企業が一体となって復



興活動を行なうことの重要性とノウハウについてアドバイス。被災市民からの聞き取り調査を行ない、それに基づいてトルコJCと今後の対応について協議。

トルコJCは、日本JCの迅速な視察に感謝の意を表すると共に、トルコ国民の危機管理意識の希薄が被害を大きくしたとの認識から、各種コンファレンスにおいてJCIまたは日本JCによる地震の危機管理教育セミナーの開催を要請。松山会頭はカンヌ世界会議での検討と、2000年札幌世界会議での開催を約束するなど、9月1日の帰国まで精力的に動いた。動く、日本JCの面目躍如！

## 日本は、動く〈山形全国大会〉

10月6～9日、第48回全国会員大会が山形で開催された。大会キーワードは「日本は動く。～共に創ろう！持続可能な地球社会～」 「共生共創のこころ～あらたなる行動を今山形から～」。山形市民会館で午後3時から始まった開会式は、常陸宮様ご夫妻のご臨席のもと、厳粛かつ華麗なる雰囲気の中で進行した。常陸宮様は、JCの理念と活動への理解と、21世紀に向かって青年の活動に大いに期待する旨のお言葉を述べられた。

9日、山形市総合スポーツセンターで開催された記念式典で、松山会頭は自らの行動で推進してきた1999年のJC運動を総括した。全国会員の約5割に当たる2万8399社からの回答が寄せられた「不況対策アンケート」、心の教育の復活を目指して進められた「地域の先生づくり」等の活動報告に加え、「全国50ブロックを回って感じたJCメンバーの本気の情熱が、必ず地域を、日本を、地球を動かしていく原動力になる。これからも、まず自分が一歩を踏み出す勇気を、一人ひとりがもち続けてほしい」と訴えた。

プレジデンシャルリースを引き継いだ上島一泰次年度会頭予定者は、「2000年というミレニアムの節目の年に、会頭としてJC運動をリードしていくことの意味を深く自覚し、若くはつらつとした日本を創造するための力の源となる、たくましいJCとして動き続ける」



全国大会（山形 '99）

と約束。全メンバーに向かって「エトパスノイエス」、何か新しいことを一緒に始めよう、と呼び掛けた。

卒業生の登壇をうながすアナウンスが流れる。ステージは、あっと言う間に埋めつくされた。1999年、JCを巣立つ卒業生は6072名。ステージ中央には松山政司、長谷部亮平、田守順、中川好大、三宅清嗣、佐藤章治……。日本JCをリードしてきたメンバーも一人の卒業生として、あふれる思いに胸を詰まらせているに違いない。声援に笑顔で手を振っていた卒業生たちも、田守副会頭の挨拶が進むにつれ、こみあげる涙に堪えきれなくなる。

入会した頃、夢中になった頃、そして社会的責任、家族や会社への負担……。JCの日々は走馬灯のように駆け巡る。会場を去る彼等の胸には、JCでの経験を糧に未来に飛び立つ勇気が漲っていたに違いない。

## グランプリは、川口の「地域の先生づくり」

今年度のアワードは、準グランプリが函館JCの「函館クリスマスファンタジー」と、南陽JCの「南陽夏の陣」に、そしてグランプリは川口JCの「川口共生環境プログラム（3Kプログラム）」に輝いた。

創立35周年を迎えた川口JCは、本年の基本理念である共創社会の実現に向け環境問題推進都市ナンバーワンを目指し、様々な取り組みを行なった。



川口市は鋳物のまち、植木のまちとして伝統産業が発達してきたが、近年は都市化が進み地域に対する愛着心が希薄になる傾向が見られてきた。犯罪や青少年問題が多発し、様々な環境問題も生じるようになってきた。

その状況下、地域で子供達を育てる重要性から、まずJCメンバーが教壇に立つことを行動目標に掲げ、2002年から始まる教育改革や松山会頭の所信を基に、環境プログラムの作成を決意し3項目のコンセプトを確定した。①「自ら学び・考え・生きる力を育む」ため子供達の主体性を引き出す。②誰にでもできるマニュアルを作成する。③学校の授業時間に合わせ、一度に学年全体で実施する。

こうして5月18日に市立原町小学校、6月15日には青木小学校でJCメンバーが教壇に立った。平日の昼間の実施であったが、多くのメンバーの協力によって無事終了した。実施後、子供達から返ってきた「ふりかえりシート」には、文字がいっぱいに埋め尽くされていた。環境に対する意見や提案、また予想もしない内容が沢山書かれており、子供達の豊かな発想に驚かされ、子供達と一緒に学べたことの喜びを噛み締めることができた。この行動は、「地域の先生づくり」という目標に拡大する可能性があり、教育現場においてプログラムの運用が拡大し、新しいプログラムの作成が必要になるものと思われる。

地域の先生づくり、誠に素晴らしい運動だ。

## カンヌを舞台に、第54回世界会議

11月6～13日、世界を代表する高級リゾート、フランス・コートダジュールのカンヌを舞台に世界会議が開催された。カンヌは世界中から集まったJCメンバーであふれ、例年にも増して多数のプログラムで賑わった。

本年、JCIの各エリア会議ではチェ会頭推薦のビジネス・セミナーが行なわれ、多くの青年経済人の関心を集めた。カンヌでは新経済システム創造実践グループ担当の田守副会頭がパネリストとして参加し、



JCI世界会議最優秀  
NOM賞受賞 (カンヌ '99)



台湾JC新年総会 (台中 '00)

日本の経済状況についての報告と共に、不況対策アンケートに基づく首相への提言など、日本JCの取り組みを報告し注目された。

## 震災救援セミナーを開催

トルコ大地震の際、松山会頭に要請された地震災害救援活動に関するセミナーは、国境なき奉仕団によって実施された。講師を委嘱された檜畑直尚96年度会頭は、「JCの行なうべき支援は、初期には支援物資の仕分け・適所への搬送等を行なうが、全国組織で意識の高い多くのメンバーをもつJCが最も力を発揮するのは、被災地復興に向けての組織だった計画的な中長期支援だ。特に被災者の心のケア『鐘の鳴る丘プロジェクト』や、地域経済への支援『BuyMadein阪神』などが大変効果的な支援だ」と語った。

様々な質問・意見が続出する充実したセミナーであった。



TOYPセレモニーでは、日本からは半田好男氏（98年度TOYP大賞受賞）が、国際交流に果たした貢献によって選ばれ、松山会頭から記念の盾が贈られた。

総会では「グローバルMOTTAINAI運動」が、JCIアワードとして正式に承認された。これにより、1993年度に岡田伸浩会頭の提唱した同運動は、カンヌを起点に5年間継続されることになった。その栄えある第1回MOTTAINAIアワードは、マレーシアのLOMに授与された。また、ウズベキスタンJCが正式にJCI加盟が承認された。2000年度の役員選挙は、会頭にニュージーランドのカレン・ビスディーが当選。副会頭には21名が立候補し、17名が当選、日本からは稲数則光（東京）が選出された。

#### 松山会頭に最優秀NOM会頭賞

注目のアワードだが、日本は7部門で榮譽に輝いた。その中には、カンヌ世界会議を担当しJCI関係委員会委員長として活躍し、パリASPAC直前に亡くなった故平沼淳一氏の業績を称え「ホアキン・ゴンザレス賞」が授与された。褒賞は続き、西尾長幸常任副会頭が優秀常任副会頭に、藤澤太郎副会頭と五十嵐信副会頭が優秀副会頭に選出された。そして、松山政司会頭には「最優秀NOM会頭賞」が贈られた。松山会頭は「大変名誉ある賞を頂き感動しています。この受賞は日本の750LOM、6万人のメンバー一人ひとりが勇気をもって、それぞれの一步を踏み出した、その行動に与えられたものであり、それだけに喜びもひとしおです」と語った。

#### 2000年1月1日、台湾で始動

ニューミレニアム、2000年のスタートである。その記念すべき年、上島一泰会頭（大阪）の公式行事は、台中で開かれた台湾JC新年総会で始動した。旧臘30日、台湾入りした上島会頭一行18名は、韓国JCの崔鎌濬会頭はじめ各国VIPと精力的に交流を図り、新年総会のスピーチで上島会頭は「阪神・淡路大震災の経験を活かし台湾大地震の復興支援

に協力する」と述べ、アジアの友人として一層の友好促進を呼び掛けた。

台中市こそ、前年9月21日の地震により2000余名の尊い命が奪われた地域であり、あえて台湾全土から復興の意味を込めて集まったのだ。上島会頭は日本全国から寄せられた台湾地震義援金を手渡し、両親を失った子供達の心のケアのためのプロジェクトのこと、医療部会が計画している日本の子供達からの「癒しの絵を送る」プロジェクトのことについても伝えた。

この会頭一行とは別に、訪台しているグループがあった。東北地区会長福内浩明（郡山）、大曲JC理事長挽野実之はじめメンバーと市民で、元日に台北で復興支援を目的に花火を上げるため台湾入りしていたのだ。

今年のキーワードは、「エトバスノイエス 新しいことを始めよう」。まずは1月1日、会頭はじめJCメンバーが行動で示したエトバスノイエス、新年行事の点描である。

#### 若くはつらつとした日本へ

1月20～23日、登録者1万1000名を超えるメンバーが京都に集まった。例年より暖かい日が続いていたが、会議の開催と共に寒気が訪れ、日程の後半に入ると宝ヶ池周辺はうっすらと雪化粧に包まれていった。

#### 国の衰退は人心にあり

22日午後、メインフォーラム「若くはつらつとした日本へ・ニューミレニアムの挑戦」の開催である。第1部・基調講演は「21世紀日本の将来像」と題し、中西輝政京大教授の講演だ。中西教授は、「国の衰退の原因は人々の心の中にあり、まさに今の日本はその危機にある。戦後50年、崩壊してしまった日本の倫理の根本である美意識を甦らせ、モノと心、進歩と伝統のバランスを取り戻すことが重要だ」と語った。

第2部・座談会は上島会頭の進行により「誇りあ



る国家・日本創造をめざして」のテーマで論議が展開した。

渡部昇一上智大教授から「太平洋戦争がなかったら、アジアはすべて植民地になっていた」などと刺激的な発言が飛び出し、会場は賛否のどよめきに何度も揺れた。小林よしのり氏の「自分も含めて戦後教育で育った世代が本当に国家を愛するには、心の中の38度線を乗り越えなければならない」との発言は、同じ教育で育ったメンバーに重く響くものがあった。金美齢氏は「自分の国を愛せない人間は、絶対に信用しない」と、かつて軍事政権に追われながら故国を思い続けた体験を語りつつ「日本人はもっと真剣に、国を憂えなければいけない」との訴えは、メンバーの心を揺さぶった。

### 国家目標が見えなければ、我々が創る

23日の新年式典、上島会頭の所信表明は自然体の語り口ながら、その強い意志を感じさせるものがあった。

「日本青年会議所の新しい挑戦、それは2000年代運動指針の策定を通じ、国家青年会議所として『若くはつらつとした日本』へ向けての国家・国民生活・経済社会・国際のビジョンを創り上げていくことだ。日本の国家目標が見えないのなら、次の世代に生きる、次の世代に責任をもつ我々が創っていけばいい。かけがえのない地球社会の平和と安寧に貢献し、顔の見える日本として、誇りある独創的な文化・文明を育み、市民主体の成熟した社会を築き、自由闊達にして活力と公共心あふれる『若くはつらつとした日本』を築き上げていく。

我々6万人が、その『力の源』になろう。皆さんと不撓不屈の精神で、JCの未来のために懸命に努力することを誓う。二度とない人生だから、志を高くもとう。二つとない祖国だから、未来をこの手で創ろう。二人とないあなただから、共に歩もう。エトバスノイエス 共に新しいことを始めよう!」。

静かに聞き入っていた会場は、一斉に鳥が飛び立

つように拍手が舞い上がった。

式典終了後は恒例の通常総会だが、その後新たに今年も、全国理事長座談会が行なわれた。議事録が取られる総会と同等の位置付けで、「2000年代運動指針の策定」と「財務運営」について活発な議論が展開された。

### 日本JCの父・三輪善兵衛氏逝く

京都会議が終わり、会頭のブロック訪問が始まって間もなく、悲しむべき訃報が流れた。2月17日、三輪善兵衛(元・善雄)氏逝去、79歳。戦後の混乱いまだ収まらぬ1948年、28歳の三輪善雄(当時)がJC創立に情熱を燃やしたことは、『明日への黎明』の初めの部分に記してある。せめて、あと一年、50周年を迎えたかったことだろう。悔やまれてならない。

護国寺へ行った。喪服の列の最後尾について小一時間、思い出が巡った。出会いは30年ほど前、東商ビルでの『明日への黎明』20周年記念誌取材座談会で黒川、小坂、堀越、服部、森下元会頭と共にお目にかかった。草創の頃の思いを、熱っぽく語られていた姿が浮かぶ。風呂敷に書類を包んで持参され、必ず返すことと念を押され拝借した。

10年ほど前、横浜岡田屋のパーティーで「黒川が逝ってしまい、一人になっちゃったよ」と、寂しそうに言われた(黒川光朝氏は1990年11月19日、40周年を待たず72歳で逝去)。1991年の京都会議で講演を依頼された筆者は、三輪さんが最前列に座っておられるので、びっくりしたことも。思い出は尽きない。ご冥福をお祈り申し上げます。

9月21日、ホテルオークラで三輪記念フォーラムが開催された。三輪善兵衛氏の熱い志、高潔な人間性、偉大な足跡を偲び、JC運動への新たな気概を燃やすフォーラムであった。

### 九州はひとつ! 9年振りの洋上スクール

4月14日(金)、『おりえんとびいなす号』が博多港を後にした。「九州洋上スクール2000」の船出だ。



井上貴博九州地区副会長（福岡）を団長に、九州各地から集まった約500名のメンバーは、16日に那覇で開かれるシンポジウム「九州・沖縄青年サミット2000」を目指し、「九州はひとつ」を合言葉に洋上研修を実施した。井上団長は、次のように語る。

「経済人として、地域人としてプラス思考に考えられないとか、前向きになれない人が多い現在、もう一度自分を見つめ直す時間を設けるため、日本JCが91年まで実施し、評価が高かった洋上スクールにチャレンジした」。

洋上研修は、まず九州出身歴代会頭によるパネルディスカッションが、野々口弘基地区元会長（熊本）のコーディネートにより行なわれた。出席できなかった麻生太郎（飯塚）、榎本一彦（福岡）、川越宏樹（宮崎）元会頭はビデオレターでエールを送ってきた。

松山政司直前会頭（福岡）は「大変革期を迎えようとしている中、行政・市民・企業がパートナーシップで横の繋がりを強め、力を合わせれば1つの力が3つになる。それぞれ発想の転換を図り、もっと政治に関心をもって地域に貢献していこう」と、檄を飛ばす。

小原嘉文元会頭（佐賀）は「事業での失敗を通して多くのことを経験し、それをバネに今後に賭ける」と抱負を述べ、「物事から逃げずに最後までやり通すという時、JCでの経験が非常に役立った」との話には皆、真剣に耳を傾けた。

鈴木健二青森県立図書館長は「21世紀へ飛躍する企業家たれ」と題する講演で、「自分の経験を元に、人間は努力すればやれないことはない。謙虚な気持ちで人に接すること」など、いつもの柔らかな語り口で、心温まる話に熱いものが込み上げてくるメンバーも少なくなかった。

15日（土）、前線を伴った低気圧が直撃。2万2000トンの客船は揺れに揺れる。まさに、船酔い地獄との闘いに、体調をこわす団員が続出。だが、船内行事は進行した。昨日に続く鈴木健二講師のセミナー、太平洋戦争末期の沖縄の子供達の本土疎開を

描いたアニメーション『対馬丸さよなら沖縄』の上映、船長招待パーティー、各班のシンボル旗制作などに熱中し、やっとの思いで那覇港に到着。4時間だけの自由時間が与えられ上陸した。

### 九州・沖縄青年サミット2000

16日（日）午前5時起床。バスで沖縄戦没者慰霊式典に向かう。午前10時、ロワジュールホテルオキナワで開催の「九州・沖縄青年サミット2000」に、沖縄のメンバーと共に参加。松山直前会頭のコーディネートで明石康国連人道問題事務次長、金美齡JET日本語学校長、ゆたかはじめ元東京高裁長官、そして鈴木館長の4氏によるパネルディスカッション「日本はアジアのリーダーになりえるのか」が行なわれた。MN特別委員会の報告は、以下の通り。

「日本は、自ら言い出さなくとも、アジア各国からリーダーになるよう依頼される国にならなくてはいけない。また、その責任がある。そのヒントの一つは、かつて琉球王国が武力を放棄することによって、その豊かな文化と繁栄を築いたことではないか。もっと日本人は、沖縄はじめ近代の歴史を勉強することが大切だ。特に、これからを担うJCメンバーには、必須の課題であろう」。

17日（月）、4日目、最終日にしてやっとうと好天に恵まれ、デッキで朝の集いが行なわれた。セミナーは「終の住みか、創造に向けて」、講師は萩原茂裕日本ふるさと塾主宰。企業経営者に対して「儲けるとは金銭的に儲かるだけでなく、自分のもとに人がどれだけ集うか、リーダーシップをとれるか、ということだ。自分の人格形成が大事であり、企業もまちも品格（伝統）をもつべきだ」などと強調し、4日間の洋上スクールは終わった。

### 参加者の感想は、如何

「参加者全員が同じ立場で共同生活し、勉強し、自分のことは自分でやり、自分達のことは自分達で決めてやるという、地域のコミュニティそのものだと感じた。一番の感想は、最初から最後まで乗船してこそ洋上スクールだということ。この機会を与えてく



れた九州地区スタッフに感謝」(土井孝信・中津)。「初の試みということもあり、運営はぎこちないままスケジュールが進んだ。愚痴も増え、途中下船する人さえいた。しかし、このスクールの本当の目的は何か。頼もしいリーダーを発掘するものであり、決して受け身で学ぶものではない。運営がうまくいかなければいけないほど、リーダーの真価が問われる。本当に自尊心を試せるスクールだった。意義深い4日間であったこと、初の試みを実行された九州地区の皆さんに大感謝。後は、来年に繋げていくことが、我々研修させて頂いたメンバーの使命と考える」(林辰大・国分)。「勉強は勿論、船の過酷を体験する絶好の機会だった。真のリーダーとは寛容と選択のできる人間……、私も船に対して寛容な気持ちを持ち、参加したことを、とても良い選択と思う。しかし、船はもういいかな……、というのが正直な気持ち。でも、この船で育んだ友情は永遠です」(大江恵子・豊前)。

## 我々が「若くはつらつとした日本」を!

7月22～23日、パシフィコ横浜で「サマーコンファレンス2000」がオープンした。テーマ「創造的破壊」への挑戦～よみがえれ! 誇りと活力。今我々が「若くはつらつとした日本」を創る)のもと、9000名以上のメンバー(登録)に加え1000人に近い市民の参加を得て、活気あふれる展開となった。

### カルロス・ゴーンの挑戦

今年の目玉は、メインフォーラムでのカルロス・ゴーン日産自動車CEOの基調講演だ。「多くの努力、痛み、犠牲が必要なことは分かっている。しかし、他に選択肢はない」と、日産リバイバルプランNRPを掲げて日産復活に挑むゴーン氏は、次のように語った。

「リーダーとして、何かを本当に変えようとするなら、トップダウンとボトムアップの両方が必要だ。トップの何人かで意思決定するのではなく、提案し、多くの人と直接話し、人の話に耳を傾けることが大切だ。階層はできるだけなくし、全社員が参加できる

ようにすれば、積極的な関心を呼び起こし、問題点は明確になり、自分達の会社にとって良い決定だというコンセンサスが生まれる。情報は社内外に公開し、透明性を増すこと。言ったことと行動を一致させること。

そうして1年、日産では社員に誇りが生まれ、やる気が表に現われ企業風土が変わった。リーダーにとって、最も大切なのは勇気だ。本当に社会に必要とされることに、勇気をもって臨めば、不可能はない。皆さん、たった一度きりの人生に、勇気をもって挑戦してください」。

### 2000年代運動指針の中間報告

メインフォーラムの後、京都会議に続く「全国理事長座談会」が開かれた。12稿にもなる「2000年代運動指針」の中間報告は、概略において理事長の異論はなく、より良い指針づくりのための建設的な意見が大半を占めた。「財政問題」は、会員数減少の問題等からみ会費値下げとそれに伴う組織形態の在り方が議論され、各問題については担当の委員会等で検討、具体的改善策の公表が約束された。

### 「ベンチャービジネスフェア2000」

会議センター各室では27のセミナー・フォーラムが開催された。展示ホールでは中小企業家に有効なビジネスネットワークの構築を図る試みとして「ベンチャービジネスフェア2000」が設営され、経営革新セミナーの開催や各種企業・団体のブースが展示された。

### 東ちづるさん、TOYP厚生大臣賞

女優の東ちづるさんが、TOYP大賞厚生大臣賞を受賞した。ドラマから司会、舞台、ラジオ、エッセイ、着物デザインなど幅広く活躍されるなか、9年前から「骨髄バンク」や「あしなが育英会」などのボランティア活動を続けている。ドイツNGO「国際平和村」の支援活動や日頃のボランティア活動の体験を綴った『わたしたちを忘れないで～ドイツ平和村より』(ブクマン社)は、日本図書館協会選定図書となった。本の売上金の一部は平和村に寄贈するなど、ボ



ランティア活動が高く評価された。

東さんは「受賞と聞いて、初めはちょっと躊躇した。でも、活動仲間に私達みんなの代表でもらうんだからと言われ、嬉しくて、亡くなった患者さん達や遺族の方の顔が浮かんで、思わず泣いてしまった。受賞は、本当に励みになりました」と語った。

### 「ゆいまーる」の心が、地球を繋ぐ

7月22～25日、G8サミット（主要国首脳会議）が終了したばかりの沖縄で、「2000青年会議所G8サミットミーティングin沖縄」（後援：読売新聞社／協賛：トヨタ自動車（株））が開催された。G8サミット参加国のアメリカ、フランス、カナダ、ドイツ、イタリア、イギリス、ロシア、日本の8カ国のNOM会頭が沖縄に集まった。

22日、各国会頭は相次いで来日し、横浜で開催中のサマコンに出席。翌日、沖縄入りし、外務省から沖縄サミットのブリーフィングを受ける。24日、宜野湾市の沖縄コンベンションセンターをメイン会場にオープニング。カリン・ビスティJCI会頭は「政府とは違うJCIネットワークを生かした素早い取り組みで、世界平和に貢献したい」と語った。

21世紀、かけがえのない地球を守る5大テーマ「IT革命・教育・保健衛生・環境・グローバリゼーション」に関し、各国JCは何をすべきか、JCIはどんな役割を果たせるか、それぞれの取り組みを交えながら具体的事例を提示し合い、共有できるビジョンを模索した。最終日には平和と繁栄をキーワードに19項目の行動計画を盛り込んだ「JC-G8共同宣言」を採択、世界に発信した。

### ゆいまーる2000

同宣言には「ゆいまーる2000」の副題が付された。「ゆいまーる」とは、古来、沖縄に伝わる島の人々の心とも言える言葉だ。皆で助け合って生きていこうという心が国を越えて地球を繋

ぐ時、そこに文化的、精神的、経済的な環境の差異を超越し、互いの文化を尊敬し理解することによる真の協調関係が生まれるという、青年らしい率直な意志が込められている。議長国の重責を果たした上島会頭は「共同宣言のテーマは、どれも地球規模の問題だ。文化の違いを認め合い、青年らしく、できることから実行していく」と語った。

### 共同宣言の前文（骨子）

「JC-G8は、21世紀を迎える世界の平和と繁栄を実現するため、JC世代としていかに世界に貢献できるか、沖縄の地に集い議論を重ねた。JC-G8は、未来に責任をもつ世代として「グローバル化時代における新たな文化の多様性」を重視し、21世紀の国際社会におけるルール、倫理、価値観確立のイニシアチブを取っていく。

IT革命の負の側面である「デジタルデバイド」の克服のために、各国内における様々な課題に対処すると共に、途上国での人材育成やインフラ整備などを支援する。教育、保健衛生、環境といった課題にも、それぞれの国での取り組みに積極的に関与しながら、国際的な協調体制を構築していく。更に、国際的なNGOとしてのJCが、世界各国のNGOと、より一層のネットワークを構築する。

JC-G8は、今後とも緊密なコミュニケーションを通じて具体的な活動を進めるために、次の5項目についてアクションプログラムを策定した。IT革命、教育、保健衛生、環境、グローバリゼーションの5つである」。



JC-G8サミット in沖縄 ('00)



JC-G8は初の試みとしてニューミレニアムの年、成功裏に終了した。討議されたテーマが21世紀にどう繋げられていくのか、気になるところであったが、進んでイタリアJCが手を挙げ、次年度の開催が約束された。

### 地球市民の日、 3年目を迎え多彩な展開

8月8日は、地球市民の日。今年で3年目を迎えるが、全国各地で多彩な事業が展開された。その一端を紹介してみよう。

**[枚方]** JCメンバーが地域の先生(オッチャン)になって、子供達と接するイベントを開催した。総合福祉会館に200名の小学生が集まり、JCメンバーと高校・大学生のサポートによって『ジュニアワールドゲーム』を開催。普段は漠然としか考えていない自分達の周りの世界のことを考えてもらった。会館の外では『心のふれあい広場』を設け、メンバーのリードで廃ペットボトル利用のロケット作りやケナフの紙すき、ダンボールでの工作など参加型イベントを行なった。

**[井原]** 7月28～29日、記念事業『わんぱく共和国』を実施。「感じる、つながる、つくりだす」をテーマに、地域の小学生46名と広島県神石郡伊勢村農園で、電気もガスも水道さえない素顔の自然を体感した。その過酷な状況の中でも子供達は遊びを見つけ、創り出し、共に楽しんだ。限りあるエネルギーや水の大切さを身をもって知り、みんなで分け合った。共に生きる喜びが、美しく豊かな自然の姿が、明日を担う子供達の胸に深く刻み込まれたことだろう。

**[横浜]** 8月5～8日、横浜・香港合同企画、環境を通じた国際交流事業：ジュニア環境大使育成プロジェクト「飛翔(はばた)け! エコフレンズ!」を実施した。横浜は、香港女青年商會との姉妹JC締結25周年を機に、意見交換・交流を図った結果、地球市民意識について共通の認識を得た。そこで「互いの価値や文化を認め合い、思いやりの心をもって共に生きることを目指す」、「家族や友人を思うのと同じ心

で、地球を共通のふるさととして愛する」という視点から、合同企画することになったもの。

### 望郷の岬公園、日本語と ロシア語でシュプレヒコール

9月30日、根室市総合文化会館などを会場に「21世紀を迎える日ロ関係と返還要求運動の役割～北方4島の一括返還を求め～」をテーマにフォーラムが開催され、都甲岳洋前ロシア大使、藤原弘根室市長などが参加した。

第2分科会では小崎学北方領土・日ロ関係委員長(京都)がパネリストとして参加。ロシアミッションやビザなし交流の経験を踏まえ、「遅れている建築技術等の向上を図るため、技術者の派遣等を考えてはどうか」と提案し、友好的アプローチの大切さをアピールした。

10月1日、根室市納沙布岬の望郷の岬公園では日本JC(第31次)、北海道地区道東ブロック(第26次)の北方領土返還運動現地大会と、北方領土返還要求国民集会が開催された。国民集会で上島会頭は「北方四島の返還は全国民の願いであり、日本JCでは今世紀に起こった問題は今世紀中に解決したい、と運動してきた。8合目まで来たところで、あと一歩が大切だ。この岬に燃える『祈りの火』が一日も早く『喜びの火』となるよう、皆で頑張っていこう」と熱く語った。これにこたえて、道民会議や元島民の方々が決意を表明、全員が日本語とロシア語でシュプレヒコールを行ない、返還運動の思いを確認し合った。

### 2000年代運動指針を採択! 〈福山全国大会〉

10月5～8日、福山市で第49回全国会員大会が開かれ、全国から1万人以上のメンバーが集まった。本大会が特別な大会と意義づけられたのは、「2000年代運動指針」の最終討議が行なわれたからにほかならない。

6日、福山リーデンローズで開かれた第107回通



常総会において、2000年代運動指針策定会議の伊藤三之議長（山形）より「個と公の調和」と「活力と知力」の2つのキーワードを基にした人間力開発と、4つの政策ビジョン（国家・地域・経済・地球）が上程された。日本と青年会議所の可能性を切り拓く方向を示す運動指針は、慎重な討議の結果、議決権をもつ全国理事長による全会一致で採択された。以下、その骨子を紹介する。

### 個と公の調和

私たちが考える明るい豊かな社会とは、個と公の調和している社会であり、個の重要性と共に自分の生まれ育ったまちや国に対する帰属感、誇り、すなわち公の重要性にも十分配慮された社会なのではないか。個と公の調和こそ、2000年運動指針の基本的哲学の一つだ。個の重視、国や公の軽視は戦後日本の大きな特徴であり、この戦後日本を総決算する時を迎えている。

### 活力と知力

もう一つの哲学は、活力と知力。戦後、我が国は経済立国という国家目標のもと、行政による過度の

規制と護送船団方式による集団主義的経済運営、中央官僚による計画市場経済運営がなされてきた。自由な競争を抑制し、自己責任を曖昧にする弊害が至る所で顕在化し、結果的に日本の活力を乏しいものにした。活力ある日本を創造するには、社会のあらゆる場面で競争と自己責任の原則を共通認識しなければならない。まちづくりや国づくりも、自らのことは自らで判断し実行し責任をもつ、という発想に基づかなければならない。

### 人間力の開発

新しい価値観をもって新しい社会システムを創造していくのは、一人ひとりの人間にほかならない。まちを創るのも人、歴史を創るのも人。時代を切り拓いていけるのは、一人ひとりの人間以外あり得ない。大変革期の今こそ、青年会議所は変革を実現していく人間の力に注目すべきだ。だとすれば、JC運動の機軸は、自らに活力と知力とを兼ね備え積極果敢に社会改革運動を実践できる人間、そんな人間力の開発に求められるべきではないか。

JC運動が理想とする「まちづくり」とは、すべての



2000年代運動指針採択の瞬間（福山 '00.10.4）



市民を視野に入れた「人づくり」、すなわち「人間力開発」運動であるべきだ。「2000年代運動指針」は、国家・地域・経済・地球という4つの具体的政策ビジョンごとに、運動の具体的方向性を示している。JC運動を展開する際には、それが「人間力開発」というJCの機軸に合致しているか否かを、常に検証してみる必要がある。

### 活力あふれる21世紀を創造しよう!

8日、ローズアリーナで大会式典である。隣接する緑町公園芝生広場には屋外会場が特設され、大型スクリーンにアリーナでの式典が同時中継された。今年も、JC運動に深いご理解を示されている常陸宮・同妃両殿下がご臨席になり、JCへの期待を述べられた。

式典のハイライト、プレジデンシャルリースの伝達式で、上島会頭は「ニューミレニアムが始まった本年、若くはつらつとした日本を目指し行動を始めた全国JCメンバー一人ひとりの勇気を結集し、活力あふれる21世紀を創造していこう」と檄を飛ばし、全員でエトバスノイエスを唱和、2000年度の成果を確認し合った。プレジデンシャルリースを胸に土屋龍一郎次年度会頭（長野）は「人間力開発を軸に、様々な社会問題にコミットし新世紀の源流となるために、皆さんの力を貸してほしい」と、全国のメンバーに呼び掛けた。

そして、式典の悼尾を飾る卒業式である。JC PRESSは次のように報じた。「開始のアナウンスと同時に、数え切れない卒業生がステージを埋めつくした。ステージ前はもちろん、1階2階を問わず、後輩達の振る幟旗が揺らめ

く。代表のスピーチにつれ、ステージの卒業生の中に泣き声が波のように広がっていった。……この熱気と涙、そして決別の覚悟を忘れずに、JCで学んだことをこれからの人生に、地域に、仕事に生かして行ってほしい。これまで巣立って行った多くの優れた先輩達のように」。

### グランプリは、大曲JCの花火節!

アワードセレモニーでグランプリに輝いたのは、大曲JC(挽野実之理事長)の「台湾花火節『がんばれ台湾』復興へのエール」だった。台湾大地震被災復興支援のため、台北で花火節を実施して現地の人々の心に希望を与え、さらに会場での秋田の特産品販売による売上金を義援金として寄贈するなど、国境を越えた人道的な活動が評価された。この事業の経緯を紹介しよう。

姉妹交流10年に及ぶ中和JCのメンバーが公式訪



全国大会(福山'00)  
式典と大懇親会



問で来日された際、「この大曲の素晴らしい花火を台湾の人達に見せたいね」とのつぶやきから、この事業はスタートした。姉妹締結当時のメンバーは、ほとんど卒業してしまい、温泉や地域の名所旧跡も案内しつくし、これからの国際交流をどうしたものか思案するなかで、花火という共同事業に新たな展開を期待し準備を進めた。

開催3カ月前、突如、大地震に見舞われたが、復興に前向きな台湾の国民性に助けられ、2000年の夜明けを復興支援と共に祝福することができた。

### 未聞の観客動員で、アンコール

1回限りの単発事業として企画したところ、30万人という台湾では未聞の観客動員（10万人以上の動員イベントは皆無）を記録し、台湾の人々や企業から第2回の開催を強く要望された。台湾企業の（PRの）期待が大きいことを考慮し、大曲JCは老朽化が著しく倒壊の危険すらある日本人学校の再建という願いをこめてスポンサーを募集し、10月には第2回台湾花火節の開催にこぎつけた。

振り返ってみると、第1回開催前の地元の反応は冷たく、なぜこの忙しい正月に？、またJCが好き勝



全国大会福山（'00）  
上島・土屋両会頭

手なことを……、という反応や無関心の人が多かった。しかし、マスコミに取り上げられたことで評判は一変し、不況下に明るい話題を提供してくれたと市民や自治体に喜んでもらえたため、第2回は非常にスムーズに事が運んだ。

台湾花火節の事業を行なってから、大曲JCは一躍注目されるようになり、メンバーは心地よいプレッシャーを感じるようになったという。事業を通じて感じたことは、これからのJCは若々しくフットワークを生かして、地域社会にかかわる必要がある。大きな成果だけを望むのではなく、小さな成果を積み重ね、JCのみではなく市民と共に、我々がこのまちをつくるんだ、という意識を広めていきたい。そのためにも目下、仲間を増やし会員拡大を心掛けている、とのことだった。

以上、創立50周年記念誌特別委員会石田伸（鶴岡）の取材レポートに基づいて記した。

### 内外のJC8000余、北の都・札幌に集う

11月6～11日、いよいよ第55回JCI世界会議札幌大会だ。日本では6番目の開催になる。内外合わせて8000名を超えるメンバーの参加で、「Spirit of Collaboration(共に作る心)」のテーマのもと世界を繋



JCI世界会議札幌（'00）



ぐ青年のネットワーク、JCの意義を確認し合い、友情を深め合った。

6日、開会に先だって行なわれた会頭記者会見でカリン・ビスディJCI会頭は「札幌は息を飲むように美しいまち、人々の温かいもてなしに感激した。札幌で多くのことを学び、多くの人と出会いたい」と語り、日本JCについては「今大会開催までの10年間にわたり、JCIに貢献してくれた非常にプロ意識の高い組織」と称賛の言葉を惜しまなかった。

開会式には秋篠宮様・紀子様のご臨席になり、「世界中から札幌に集う若者達が素晴らしい21世紀を創ることを期待する」とのお言葉を述べられた。

7日14時、パークホテルの第1回総会では、ロバート・F・ケネディJrが基調講演を行なった。「我がケネディー族にとってJCは身近な存在であり、伯父ジョン・F・ケネディはTOYPアワードを受賞している」と前置きし、かつてハドソン川やロングアイランド海峡の汚染防止など、環境保護運動で指導的役割を果たした経験から「人間は自然によって保護されている。環境を守ることは長期的に見て経済の発展に繋がるものだ」と発言し、大きな拍手を呼んだ。

### 「心を、手を、仕事も、地域も、すべてを繋ごう！」

環境といえば7～12日、札幌メディアパーク・スピカで「エコ&フューチャーメッセ」を開催したが、開幕式には生物にご造詣の深い秋篠宮・同妃両殿下もご来場になり、地球環境保全をテーマにした展示を興味深くご見学になられた。

上島会頭は開催国・日本の代表として多くの会議、セレモニーでスピーチしたが、世界中のメンバーに向けて青年が「力の源」となって明るい21世紀、豊かな世界を創っていきましょうと呼び掛け、「心を繋ごう、手を繋ごう、仕事も繋ごう、地域も繋ごう、すべてを繋ごう」と、メッセージを送り続けた。

### TOYP、俳優アンディ・ラウ氏

9日、世界会議で最も華やかで人気の高いプログラムTOYPセレモニーが、札幌コンサートホール・キタラで開催された。札幌で、世界中から傑出した若

者として選ばれたのは香港の俳優・歌手のアンディ・ラウ氏など11名だった。受賞者には大リーグのサミー・ソーサ氏（ドミニカ共和国）やパソコンOS「リナックス」の開発者ライナス・トルバルド氏（フィンランド）も選ばれていたが、欠席だった。ラウ氏は「私は特別な人間ではない。諦めずに努力すれば、誰もがTOYPになれる」と喜びを語った。

他方、JCIアワードで日本の受賞は合計14個の獲得で、最優秀NOM賞、最優秀NOM会頭賞、最重点テーマ賞（業種別医療部会）などを受賞した。

### 困難に負けず、夢の実現を

カリン・ビスディ会頭は、ブヴェラ新会頭に明日を託した後、ラストスピーチで「未来はビジョンある人達のもので。皆さん、自分がどうありたいかを自分自身で決め、どんな困難にも負けず、夢を実現してください」と語り掛けた。彼女の、この1年間の不屈の意志と、勇気ある行動を知る満場の参加者の拍手は、いつまでも鳴り止まなかった。

7日間の会議も大詰め、いよいよ11日は会頭主催晩餐会だ。大会旗が札幌から来年開催のバルセロナに伝達されるや、会場からは大きな喚声拍手が巻き起こった。生バンド演奏にのって、今や遅しとダンスタイムに変わり、札幌大会最後の夜を満喫していった。

### 「北方見聞録」

「札幌の7日間が終わった。今まさに札幌を後に、飛行機が飛び立とうとしているなか、北海道全体の開拓者精神と月並みな言葉になるがクラーク博士の『ボーイズ・ビー・アンビシャス』が頭から離れない。連日の取材で睡眠不足なのに、興奮さめやらず眠れぬフライトとなった」。MN特別委員会・JC PRESS特別取材チームによる「北方見聞録」（12月号）は、こう結ばれていた。

## 21世紀のJC運動キックオフ

2001年1月18日早朝、土屋龍一郎会頭（長野）はじめ日本JC役員団は、恒例の下鴨神社での新年初



祈願を行なった。底冷えする神殿で玉串を奉典、21世紀、2001年度JC運動の成功を祈願した。

一行は京都府庁に荒巻禎一知事を表敬訪問した。知事は「青年の力で21世紀を創造してほしい」と新世紀JCへの期待を述べ、併せて「大いに、京都を満喫して行ってほしい」と語った。記者会見では、全国紙、地方紙などマスコミ各社の記者から、メインフォーラムのテーマや創立50周年を迎えたJCの21世紀の目標など、鋭い質問が投げ掛けられ、改めて京都会議への関心の深さが感じられた。

宝ヶ池プリンスホテル高砂の間で行なわれた榎本頼兼京都市長招待による歓迎レセプションで、市長は「1967年以来続いている京都会議は、すでに冬の京(みやこ)の風物詩で、市民に最も親しまれているイベントである」と、歓迎の意を表した。市長歓迎レセプションには、スイスから来日したジョージ・ブヴェラJCI会頭が関空から直行。「車窓から見た京都の美しさに触れ、この歴史の都から1年の活動をスタートするところに、世界で最もパワフルな日本JCの力の源泉がある」と、祝辞を述べた。

#### 豊田章一郎名誉会長 JCの起業家精神に期待

1月18～21日、京都会議には1万人を超えるメンバーの登録を得た。そして20日、メインフォーラム第1部は、「魅力ある日本の創造」のテーマで豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長の講演である。

「日本の社会システムは行き詰まり、大きな転換期を迎えている。問題の先送りは、益々閉塞感を招くばかりだ。今こそ、創造的・魅力的な経済社会のビジョンをつくるチャンスだ。ビジョンを単なる理想と捉えることなく、行動目標として実践する。手が届きそうになったら、新しいビジョンを構築する。この繰り返しだが、社会を発展進歩させる。それができるのは青年であり、とりわけJCのような起業家精神溢れる青年経営者に、大きな期待を抱いている」と語った。

第2部は、鼎談「創始の精神に学ぶ」。千宗室第8代会頭(京都)、山崎富治第10代会頭(東京)に土屋会頭が加わり、角田宝一副会頭(城陽)の軽妙

な進行で行なわれた。両OB会頭は、ときに辛辣、ときにはユーモアを交えて語ったが、その根底には常に「新日本の再建は我々青年の仕事である」という気宇壮大な決意、創始の精神があったことを、改めて認識させられた。

第3部はパネルディスカッション「新世紀LOM進化フォーラム」。横山英子東北地区担当常任理事(仙台)、野澤慎吾新潟ブロック協議会会長(新潟)、谷村則幸理事長(古河)、竹内雅浩理事長(東海)の4名が、福内浩明副会頭(郡山)のコーディネートにより、新世紀のLOMとNOMの関係、地区・ブロックのあり方などについて議論した。このフォーラムには会頭公式訪問地50LOMと公募による100LOM、合計150LOMの理事長が客席で操作する端末によって、同時モニター調査が行なわれた。質問に対する答えが瞬時にスクリーンに映し出され、そのデータを基に各パネリストが意見を述べるという、ライブ感覚あふれる議論が展開された。

### 土屋会頭、3つのコミットメント表明

21日、いよいよ新年式典である。所信表明で土屋会頭は、フランスの作家ジャン・ジオノの『木を植えた男』を引用し、JCメンバー一人ひとりが木となって地域という林を作り、日本という森を豊かに繁らせていこうと呼び掛けた。そして、自らも今年1年を出発点とし、遠い道程をたゆまず歩み続けていくことを誓ったうえで、新世紀への3つのコミットメントを表明した。

「2001年、この京都で21世紀最初のコミットメントをします。それは、2001年JC宣言文の起草です。普遍の青年会議所精神を引き継ぐために、慣れ親しんだ今のJC宣言から、現在の日本とJC運動を取り巻く環境に合わせることで『変革の能動者たらんとする青年』の使命だと思っています。21世紀の始まりにふさわしい、10年、20年、30年先にも時代を切り拓く先覚者であるための心意気を表わすものにしたいと思います。」



第2のコミットメントは、創立50周年を迎えた本年の事業を通じて、大きな森（日本のJC運動が刻んだ精神のしるし）を体感できる一年とします。4月22日に予定している記念事業では、全国の理事長と出向者により、日本社会に新世紀の行動提案を投げ掛けます。

第3の、そして私自身へのコミットメントは、現在の厳しい経済状況から逃げることなく、また家庭の尊さを忘れずに一年を送る、ということです。私は、次の世代が30年後の未来にも変わることなく木々を植え続けていてくれるために、一年間の職務に人間力すべてをかけることをお誓い申し上げます。

新世紀へのコミットメント、一年間よろしくお願ひします」。

## JCI、最重点テーマに 「社会起業家」

京都会議が終わって早々、JCI法制顧問・日本JC直前会頭上島一泰（大阪）がマイアミに飛んだ。今年最初の常任理事会に出席するためである。常任理事会では、世界中のLOM約900カ所で一斉に活動できるテーマ等について議論された。そして、全世界のJCメンバーのアイデンティティとして「ソーシャルアントレプレナー・イン・アクション、行動する社会起業家達」が決定した。

上島JCI法制顧問は「従来の青年経済人という言葉より、はるかに明確に自分達の思い、立場を表わしている言葉だと思う。かつて、日本が提唱したMOTTAINAIは世界中のJCの共通テーマとなったが、これから向こう5年間は、JCって何だ？ という問いに対して、行動する社会起業家達と答えよう」とインタビューに答えた。

### 日本JCの選択

ここ数年、日本JCにおいても自らの進むべき方向について活発な議論が行なわれてきた。NPOのような市民団体に進むべきか、青年経済人の色を濃くし経済団体の道を選択するのか。一時、議論は日本最

大のNPOという方向に落ち着いたが、いざNPO法が施行されてみると、単年度制のJCにはNPO法人に比べて活動するうえで壁があることが分かってきた。では、どの道を選択するのか。その辺の事情について、土屋会頭は次のように語る。

「JCには、単なる経済団体ではない、という創始の精神があり、全国各地には50年間培ってきたまちづくりのノウハウがある。全国に展開できるネットワークもある。そういうJCの特性を最も生かせる方向として、社会起業家という考え方に集約されました。

NPOの活動が活性化してきた背景には、医療や福祉、環境など様々な分野において、行政や企業だけでは担いきれなくなってきた事情があります。しかし、それらが有機的に結ばれているかということ、いまだし、というのが現状でしょう。

JCは、専門知識では各分野のNPOには及ばなくても、行政との対応、企業の実態、NPOへの理解という他にはない知識とノウハウをもっている。それらを有効に活用し、それぞれの活動を結びつけることで、私達はインターメディアリーと言っていますが、社会全体をより良い方向に向けていこうと考えました。

大事な点ですが、JCは単なる仲介者ではない。単年度制とはいえ、JCは常に社会のあるべき姿を考え、それを踏まえて今何をすればいいのか、判断し実践するのが社会起業家だと思っています」。

## 社会起業家ミッション、アメリカへ

4月25～29日、「元気あふれる社会起業家育成グループ」を中心とする「社会起業家育成米国ミッション」がサンフランシスコを訪ね、社会起業家について研究してきた。

一行は、ジェッド・エマーソン特別講師（ハーバード・ビジネススクール講師）のレクチャーを受けた。素晴らしい講義なので、「アントレプレナー挑戦委員会」委員長善林隆充（宇都宮）の講義レポートに基づいて、社会起業家の実像を描いてみよう。



## 社会起業家の成功条件

「舞台は、モンタナ州ビュート。1920年当時、人口10万人強の平均的な都市だった。それが、60年代後半になる頃には、なんと3万人程度にまで激減してしまっただ。まちの基幹産業だった巨大な鉱産会社が、閉山に追い込まれたからだ。長年の掘削による巨大な窪地の残骸は放り出されたままで、水質・土壌など環境汚染の温床となった。5%だった失業率は20%にまで上昇した。

悲惨なエピソードだが、まちのほとんどを焼き尽くす大火災が発生した時、住民達は燃え盛る炎を前に喝采を浴びせたという。

そのようなまちに、一人のソーシャルアントレプレナーが現われた。名はドナルド・ピーブルズ。教育に携わる熱意溢れる青年だった。

一般に、社会起業家の成功条件として『先見の明・明確なビジョン・ビジョンを実行に移す戦略』が必須なのだが、彼にはこの全てが揃っていた。

故郷に絶望し将来を悲観した彼は、敢然として市長に立候補する。断末魔のまちに対抗馬など現われる訳もなく、市長の座を手にする。まず彼が目にしたのは、このまちが唯一もっている負の資産、環境問題だった。モンタナ経済研究開発所を設立し、環境汚染のまちをいかに立て直すか、身を挺して調査・研究した。そこで生み出された利益は、奨学金制度の創設など人材育成に振り向け、経済的・社会的価値を創造していった。

そして今日では、環境問題に敏感な企業・環境ビジネスを事業とする企業群が、このまちに移ってくるようになり、まちは以前のような活気を取り戻すまでになった。

いまやモンタナ経済研究開発所は、NPOとして最大規模の就労者200人以上を抱え、年商3000万ドルの組織になった。その存在は、まちの税収や人口増大に飛躍的な効果をもたらしている」。

## 社会起業家の役割・6箇条

最後に、同レポートに記されている「ソーシャルア

ントレプレナーの役割・6箇条」を紹介しておこう。

①チェンジ・エージェント(変化の促し手)になる、②ソーシャル・バリュー(社会的価値)の創造、③新しいチャンスを追いかけていく、④継続的に革新を図る、⑤今これしか資源がないから、ということに制限されず大胆に活動する、⑥より高く広い意味での責任感をもつ。

## 日本JC50周年記念フォーラム

4月22日、東京赤坂のホテルニューオータニ鶴の間において、日本青年会議所50周年記念フォーラムが開催された。全国から集まった理事長、メンバーに加え国会議員、省庁など行政関係者、経済団体、NPO団体など約2000人が参集した。

森喜朗総理は主賓挨拶で「初めて立候補した時、党の公認を受けられなかったが、当時の牛尾治朗会頭はじめJCの仲間が応援してくれ当選できた。以来、自分はJC党だと思い、常にJC活動を意識してきた。50周年を契機に青年としての思いと行動で、745の地域から大きなうねりを起こし、21世紀の日本のあるべき姿を創造してほしい」と、エールをおくった。

中曽根康弘元総理は基調講演で「指導者に必要なものは正しい歴史観と哲学、明確な国家戦略、己を顧みる宗教心である」と明言。ご自身も昭和28年入会のOBであることから、熱い思いでまちづくりに取り組んだ過去を語りつつ、「和魂洋才という言葉の意味を考え、各々が足元を照らしたJC活動を展開することが大切なのだ」と結んだ。

## 「新日本創世紀」

引き続き、パネルディスカッション「新日本創世紀」が行なわれた。市民の意識・視点を明確にもった「新経済市民団体」としての方向性を見出すために、樋口廣太郎アサヒビール名誉会長、成毛眞インスパイア代表取締役、土屋会頭をパネリストに、角田副会頭のコーディネートで行なわれた。

日本経済の再建を考えるに当たり、向かうべき





50周年記念フォーラム（東京 '01.4）

ターゲットは「地域主権型社会の確立」である。そのためには、それぞれの地域が自立し活性化しなければならない。そこで最も重要なのが自主財源の確保であり、その政策として「市町村合併・広域連携」の推進、「教育システム」の改革、積極的な「政治への参加」を促すことが求められている。それらの政策について、JC運動の役割と機能について議論が交わされた。

■21世紀日本の最大キーワードは？

樋口「現在は経済だが、教育も大切」

■日本経済再生に最優先の政策？

成毛「個別の企業が個別に。国の世話になっている企業が多過ぎる」

樋口「自己責任。国民の志と同じで当たり前」

■地域経済再生と地域主権について？

樋口「地方の銀行が地元でお金を貸すより、国債や中央銀行債券を買っていないか。JCでチェックすることが大事」

成毛「IT革命は一段落。非IT企業がITを使ってどう再生するか。パラダイムを変える必要がある」

土屋「地域主権のポイントは2つ。権限の委譲と税財政の委譲。3割税制の現状では、地方での歳出が多くなっている。地方での財源の確保が重要」

■市町村合併について？

成毛「合併には賛成。道州制も議論すべきではないか」

樋口「JCが本年を合併の年と位置付けたことに感謝

する」

土屋「日本再編絵巻を策定した。市町村に先駆けて合併するJCもある」

■教育改革について

成毛「若い人が、どう教育に携わるかが鍵。インターネットによるアメリカの教育市場は46億ドルと言われ、オーストラリアではインターネット・ハイスクールの卒業生が20%を超えた。企業よりも、インターネットが有効に使える」

樋口「競争なくして活力ある教育はありえない。向上心のない教員をなくし、社会より教員を登用。もっと校長に教材選択と人事権限を与えるべきだ」

土屋「JCでは『地域の先生づくり』やPTCA運動を推進しており、日本型チャータースクール制度の構築や、企業と連携した『社会体験実習』の実施などにも取り組んでいる。行政・学校・企業・家庭・住民が一体になった連携が必要」

■積極的な政治への参加

樋口「JCも最近、極めてオープンになってきた。今後も頑張ってほしい」

成毛「日本人全体が文句ばかり言っている中、JCは自己責任に加えて、正しい方向の議論をしている。この方向で活動を続けてほしい」

## 21世紀行動宣言、「日経」に意見広告

50周年フォーラムは終盤に入り、「JCアクションプラン21」の骨子が発表された（詳細は7月に発表）。昨年、日本JCは「2000年代運動指針」を策定し、国家・地域・経済・国際の4つのビジョンで「個と公の調和のとれた、活力溢れる成熟した社会の創造」を目指し活動する、と発信した。そして本年は、目標設定を30年後の2030年に定め、望むべき「日本の現形（かたち）」をより具現化して運動を展開していくため、「JCアクションプラン21」を発信したのだ。同プランは、国家・地域社会・経済・国際社会における21世紀アクションプラン21項目からなる。

そして、4月24日の『日本経済新聞』には1ページ



の意見広告を公表した。「私たちが創ります。あしたの日本を」と、大きな活字が飛び込んでくる。本文コピーには「JCアクションプラン21」が掲載されているが、ここではトップで紹介されている3項目、いわばJC運動の3本柱を記しておく。

①市町村再編を含む「地域再生プラン」を構築します。

②PTAからPTCAへ—学校・家庭・地域が一体となったPTCA運動を推進します。

③「社会起業家」として、地域から日本経済の活性化を目指します。

## 「チャータースクール」のすすめ

5月30～6月3日、地域の先生づくり運動推進委員会は狩野牧人委員長(尾道)を団長に、日本型チャータースクール制度導入の一助とするため訪米、見聞を広めてきた。一行は、次の施設・学校を訪問した。CANEC(チャータースクールに関する情報提供NPO)、Gateway High School(学習障害をもつ10代のための進学校)、River School Charter(行動を通じ知識構築を目指す学校)、Napavalley Language Academy(メキシコからの移民のための英語とスペイン語の2カ国語教育)など。

アメリカでは手作りの公立学校が素晴らしい成果を挙げていた。既存の学習カリキュラムにとらわれず、いろいろなタイプの教え方、学び方を実践し、子供達に多様な学習機会と選択を与えていた。

その後、狩野委員長は、『We Believe』10月号「LOM主権で創る地域の未来」シリーズ欄に、「あなたも手づくりの公立学校を創ってみませんか」という一文を公表した。要旨を紹介しておく。

### 教える自由・学ぶ自由

1992年、アメリカで第1号校が誕生して以来、2001年現在で全米38州においてチャータースクール法が制定され、開校は2000校を超えている。既存の学校教育に満足できない教師や父母達により、自分達の教育理念による自前の教え方と、州政府から支給され

る公的資金で運営する公立学校を創っているのだ。

州の学習カリキュラムに捉われず、色々なタイプの教え方で「教える自由」を実践し、子供達に多様な学習機会「学び方」と、選択肢「学ぶ自由」を提供している。例えば、学習障害児と健常児と一緒に学んでいる学校、芸術中心に展開している学校など、特色のある学校が開校されている。チャータースクールは行政が上から設置したものではなく、下(現場)からの学校づくりである。既存の公立学校に公平な競争原理が導入され、相乗効果を上げている。

### 教師の創意工夫と結果責任

規制から逃れる代わりに、チャータースクールは結果責任を負わねばならない。3～5年という契約期間内に、認可申請時に計画した通りに子供達を教育できなければ閉校になってしまう。既存の公立学校では負わなくて済む教育責任を、チャータースクールは自ら引き受けている。公的資金を受けて運営している以上、結果責任は当然という考え方に立っているのだ。

そこで、教師の教え方には創意工夫が必要とされ、また親や地域社会の学校運営への協力が、重要な役割を担うことになってくる。教育に希望や使命感をもつ教師にとっては、教える自由が与えられるので、自らの技能・才能・情熱を発揮することができる。そこでは質の高い教え方、学び方が展開され、子供達の学力向上はもとより、豊かな感性や創造力が育まれる。

ハドソン研究所のチャータースクールに関する報告書によると、学力が向上した、学ぶ意欲が高まった、など良い結果が報告されている。閉校になったスクールは4%程度で、原因は資金難などの運営面にあるという。

### 日本への導入

昨年12月に発表された教育改革国民会議の最終報告の中に、「新しい時代に新しい学校づくりを」と題し、「新しいタイプの学校(コミュニティスクール等)の設置を促進する」という項目があった。明らか



に、アメリカのチャータースクールをモデルにしたもので、国会議員の間や日本全国各地でも色々な動きが出てきている。

我々JCメンバーの責務は、数年後に「チャータースクール法」が制定された時、JCメンバーや教育に希望と使命感をもった教師を中心に、チャータースクール申請ができる土壌を創り出しておくことにある。「どうです。あなたも手づくりの公立学校を創ってみませんか?」と、狩野委員長の記事は結ばれていた。

JCメンバーは、まさに子育て世代の中核である。全国3万5000にのぼる小・中学校のPTAを通じて、教育に関わっている世代なのだ。JCの教育改革運動には、期待するところ極めて大きい。

## サマコン、新世紀コミットメント

7月21～22日、パシフィコ横浜でサマーコンファレンスが開催された。

新世紀コミットメントフォーラムは、国立大ホールに石原伸晃行政改革・規制改革担当大臣を招きオープンした。石原大臣は「民間でできることは民間で、地方でできることは地方に任せる」と原則論を語り、「これまでの行政、税金の無駄をなくし、本当に国民に役立つようにしていく」と語った。続いて、松本秀作副会頭（枚方）の進行によるリーダーズトークでは、石原大臣と土屋会頭が意見交換し「変化を恐れず、先送りせず、痛みが伴ってもやり抜く覚悟で、課題を次世代に残さず、自分達の責任として行動し、解決を図る」ことを確認した。

### 新宣言第1案発表

今年のサマコンで注目すべきことの一つに、「新宣言第一案発表—新宣言へのコミットメント」があった。新宣言策定会議により年初から議論されてきたが、その第一案は「日本の青年会議所は 混沌の状況を打ち破る 個人の強い自立性と社会の高い公共性が 生き生きと協和する確かな時代を切り拓くために 一人一人が率先して行動することを宣言する」とあった。成田治新宣言策定会議長（仙台）の文意

解説の後、質疑応答では20人以上の理事長が発言した。

現在の宣言が採択された88年以来、13年ぶりの改訂である。JCの立場を社会に対して鮮明に示すものだけに、理事長の発言を参考に次案策定の会議に入ることになった。土屋会頭は「一つの言葉、一つの表現について、これだけ活発な論議を交わすことができる。それがJCの価値だと思う」と積極的な参画を称え、第1案に対し全国メンバーからより多くの意見が寄せられるよう要請した。

## 日中友好交流、訪中経済ミッション

6月17～20日、「日中友好の会」シニア・現役と、経済ミッション参加者など160名余のメンバーが北京を訪問した。

松本副会頭の「沢山のメンバーに集まって頂き有難うございます。必ず、何かを見つけて帰って頂きたい」の一声の後、中華全国青年聯合会（全青聯）倪部長の歓迎挨拶に続いて贅沢な「オリエンテーション&全体食事会」が始まった。翌18日はIT、繊維、食品、建設の4コースに分かれて現地企業訪問。各コースとも内容充実のスケジュールで、「大変ためになった」との声が聞かれた。

夕方、結団式で土屋会頭は「中国の活力に驚かれましたと思いますが、今回は71社の中国企業家の参加も予定されているので、積極的な参画をお願いします」と、力をこめて挨拶した。

「要人会見」、中国企業家との「ランチョンミーティング」、中国企業家71名とマンツーマンで行なわれた「業種別テーブルディスカッション」、学識経験者による「日中ビジネス交流推進シンポジウム」など、多彩にして充実した経済ミッションだった。

## 第32次北方領土現地大会

8月4～5日、根室市で第32次北方領土現地大会が開催された。20世紀に起こったことは20世紀に解決するという意気込みは、残念ながら世紀を越して



しまった。しかし、今回は初めて実行委員会を組織して大会の成功を期し、北海道から九州まで約1800名の登録となった。

4日、根室市総合文化会館で増田再起氏脚本・演出による演劇「9月5日」が開幕。ソ連に不法占拠された北方領土の当時の様子を、年老いた元島民が回顧する物語で、出演者のほとんどが根室市在住のエキストラだ。その迫真の演技を通して伝わってくる「北方領土への思い」が、歴史の奥深さを伝え観客に大いなる感動を与えた、と米屋慎一（黒部）はJC PRESSに報じた。

続いて、元島民の北連協事務局長児玉泰子氏が、講演会で返還運動に対するJCへの期待を述べた。実際、本大会には土屋会頭はじめ8名の日本JC役員が参加しており、JCがいかに重要な位置付けをしているのか、実感されたことと思う。

5日早朝、根室市納沙布岬の会場で根室JC早朝例会、座談会「真世紀返還要求運動」、第32次北方領土現地大会式典が行なわれた。座談会は藤木茂大会実行委員長（八女）をコーディネーターに土屋会頭、上野昌也副会頭（大阪）、濱屋正一理事長（根室）をパネリストとしてJCの返還運動について討議され、これを基に式典において「真世紀返還要求コミットメント」を発表した。

これに先立つ7月9日、東京・麻布台の駐日ロシア大使公邸で大使招待の昼食会が開かれた。出席者はロシア側がパノフ大使、ドプロボリスキー公使など5名、日本側は土屋会頭、宮林雄彦専務理事（横浜）など6名。ロシア大使招待による昼食会は日本JCとしても初のことであったが、アットホームな雰囲気の中で進められた。

話題は土屋会頭、檜畑直尚ロシア友好の会会長（和歌山）を中心にJCの組織から教育問題、小泉政権にまで及んだ。パノフ大使は「日口の学生交流等の事業をされているそうだが、ロシアの学生は北方領土問題についてどう思っているか」との質問が飛び出し、ロシア側が同問題をしっかり考え始めた感触

を得た、と同席の藤木委員長は語っていた。

## 日本JC、国連DPI登録NGOへ

待望の報せが、国連DPI(広報局)から届いた。日本JCを国連DPI登録NGOとして認可する、という吉報である。ちなみに、NGOという名称は国連が認可した団体にしか使われない言葉なのだ。この認可により今後、国連のグローバルスタンダードに関する情報が定期的に日本JCに入ることになった。同時に責務として、国連が発信した情報を国内で広報すると共に、協力できることは可及的速やかに実践することになる。

土屋会頭、上野副会頭ら一行28名は、9月10～12日に開催予定の国連NGO総会に参加する目的で、ニューヨークへ旅立った。特に12日には、土屋会頭が国連でスピーチすることになっていた。日本のNGOとしては初のことで、極めて名誉な機会を与えられての訪米だった。

そして、9月11日早朝。土屋会頭は、同行の上野副会頭からの電話で起こされた。世界貿易センタービルが燃えている。テレビや新聞で生々しく報じられた、あの情景の中に土屋会頭一行は巻き込まれていたのだった。

予定のスケジュールは、全てキャンセル。一行は、国連ビルから数百メートルという宿泊先のホテルに缶詰状態になり、精神的、肉体的にも極限に近い状態に追い込まれてしまった。ホテルの一室では、刺々しい議論をする状況もあったと聞く。災難、というほか言葉はない。残念無念！

## おもろしまっせ新世紀〈大阪全国大会〉

10月11～14日、第50回全国会員大会 大阪大会がリーガロイヤルホテル、国際会議場、大阪城ホールを舞台に繰り広げられた。大会スローガンは「おもろしまっせ新世紀-活力・知力を呼び起こせ!!」。

また、本年は日本JC創立50周年に当たり、記念式典や記念事業が全国会員大会行事に組み込まれ



た。式典の様子はプロログで叙述したので、ここでは3つの記念事業について記録しておこう。

### 21世紀・エコロジーとビジネスの構想

グンター・パウリ氏(1982年度TOYP大賞受賞、ジュネーブ・ZERI財団代表)が基調講演で「20世紀は破壊の時代だったが、21世紀は環境を大切にす時代」と明言された。続いて、同氏と東大生産技術研究所山本良一教授、土屋会頭が、環境ジャーナリスト枝廣淳子氏の司会でパネル討議に入った。中小企業とエコの問題などが語られ、経営者としてもJC運動の方向性を探るためにも有意義なセッションであった。

### NPOアワード in おおさか

105組のエントリーから第1次審査を通過した10団体を一堂に集め、活動内容を紹介すると共に日本NPO学会、各地NPOセンター等の協力によりグランプリ1団体、優秀賞9団体を表彰した。グランプリには日本聴導犬協会(長野県)が選ばれた。同協会は聴導犬障害福祉と動物福祉の2つの福祉を実践し、全ての人と動物が共存できる優しい人・まち・環境づくりを目標にした活動が評価された。

聴導犬はアメリカに約4000頭、イギリス約700頭、日本は81年から育成されて20数頭という。JCの地道な活動が聴導犬の社会的認知度を高め、明るい豊かな社会への一助となることを期待したい。

### 我が家の価値観を考えるミュージカル

大阪府立青少年会館文化ホールで2回公演。我々が失ったものを取り戻すため、コミュニティの最小単位・家族に焦点を絞り、家庭における個と公を考えるミュージカルだ。

筋書きは「現代を象徴するバラバラ家族の3人兄弟が、天使に導かれて理想の家族パーフェクト・ファミリーを探す旅に出る。自分達の過去、そして先祖を辿っていく。戦争で死んだお婆ちゃん、野球選手で一軍昇格試験の日、妻に輸血するため夢を捨てたお爺ちゃん。そんな家族を紐解いていく間に家族って何だろう、と考えさせられ、最後に有難う、と感

謝の気持ちを抱かせる」。

出演者はJC現役・OBの子供達からオーディションで選び、劇団四季OBの杉田氏の指導を仰いで、「我が家の価値観創造会議」の提言をミュージカルで表現した。

公演当日の夕方、大阪は南港、ATCでの大懇親会会場に駆けつけたJC役員の一部が、ステージに上がるや「いま、ミュージカルを見てきました。ただ涙、涙、涙で帰ってきました」との絶叫スピーチが印象的だった。

## 第50回全国会員大会式典

14日9時30分、大阪城ホールで第50回全国会員大会大阪大会式典「今輝けるものとの出会い」が挙行された。大会テーマは「人間力で彩り地域から描くこの国の現形(かたち)」。演出コンセプトは「感動」。新クロニクル初年度のJC運動の集大成・大会式典において、様々な輝けるものとの出会いを「感動」という形で演出し、体感した人間力を胸の奥深く刻み込み、21世紀の地域(LOM)の運動へ繋げていく。

式典の冒頭、志半ばにして亡くなられた物故会員、並びに先の同時多発テロによる犠牲者に対し黙祷を捧げる。続いて、平和と生きる喜びを謳うゴスペルシンガーの歌声で開会である。

今年で36回にわたって全国大会にご臨席頂く常陸宮・同妃両殿下をお迎えする。太田房江大阪府知事、磯村隆文大阪市長の挨拶に続き、殿下からは、創立50周年という記念すべき全国大会で2万名余のメンバーに会えたこと、今までに青年会議所が果たしてきた運動に対する評価、青年としてわが国の時代を担っていくことへの期待など、お言葉を頂いた。

今年度活動報告、褒賞授賞(後述)発表に続き、2002年1月1日から使用される新宣言が発表された。

### 2001年JC宣言

#### 日本の青年会議所は



第50回全国会員大会  
(大阪 '01.10)



### 混沌という未知の可能性を切り拓き 個人の自立性と社会の公共性が 生き生きと協和する確かな時代を築くために 率先して行動することを宣言する

土屋会頭の総括スピーチは、新宣言の策定はじめ京都会議でのコミットメントに対する「謎解き」から、この1年間、会頭として全国のJCメンバーに託したメッセージを再確認したうえで「全国メンバー一人ひとりの心の中に、木を植えることができたとすれば、私は幸せであります。そして私は、この年の会頭を務めさせて頂いたことに感謝すると共に、これからの新世紀へのコミットメントを宣言します」と語り、高らかに新宣言文を朗唱し、ラスト・スピーチを結んだ。

土屋会頭の熱い思いが込められたプレジデンシャルリリースは、松本秀作次年度会頭予定者に伝達された。

松本予定者は、「信じてきたものが崩れ去っていく中、社会は様々な方向性とエネルギーをもった混沌とした時代になりました。我々は、この混沌の時代から、夢と希望を胸に飛び立たねばなりません。今こそ青年としての勇気を振り絞り、混沌を打開することが我々の大なる使命と確信し、全国のメンバーと共に邁進することを誓います」と、力強く抱負を述べた。

フィナーレは卒業式。4521名の卒業生が壇上に並ぶ。客席からは、盛んな声がかかる。佐藤栄一監事(宇都宮)が、卒業スピーチをした。「それぞれのJCライフを噛み締める顔の中で、志半ばに旅立った三木明義君はじめ物故会員の遺影に、JAYCEEとして、人間として、私達の心に残された思いの大きさを改めて感じる」と語る。ユーミンが、「卒業写真」を歌う。会場内の盛り上がりは最高潮に達し、大会式典は終了した。

### 褒賞グランプリは、「ぐうっとのしろ」

13日21時、国際会議場はアワードバンケットだ。夕方5時半から始まった大阪南港のATCで開かれ

た大懇親会の酒気が抜けぬ勢いで続々と詰め掛け、定刻には満杯の状況になった。申請167事業の中から36事業に絞られ、今夜、授賞発表となった。まず、50周年特別賞だ。角田副会頭の歯切れの良い声が響く。稚内、となみ、土岐、鳥取、草津の5JCが獲得した。続いて、優秀賞・準グランプリは2JCである。駒ヶ根「青少年の育成～地域の大人とともに～」、穂の国「穂の国農園」と決まった。そして、最優秀賞・グランプリは能代JC「ぐうっとのしろ一木の心あふれるまちづくり」に輝き、佐々木利顕理事長に土屋会頭からカップが手渡された。能代の事業内容は、以下の通り。

目指すべきまちの姿を5つのビジョンとして表わし、木の心推進事業を展開している。その中核となる次世代育成事業『子どもふるさと塾』ではコメ物語、ドキ土器工房、わくわく冒険スクール、そば蒔きそば打ち体験の他に『モクモク花いっぱい運動』のフラワーボックス製作や花植え、『日本一の黒松並木づくり』の植樹にも参加した。また『市民が選ぶ新能代八景』の選定や、『木の心ネットワーク会議』なども開催している。

### 新たなる半世紀に向けて

9.11アメリカ同時多発テロ後に、テロに屈しないという思いからJCI世界会議バルセロナ大会が11月4～10日の7日間、約1万人が集まって開催された。アワードでは、最優秀会頭賞に土屋隆一郎会頭が、最優秀NOM賞に日本JCが選ばれた。

創立から50周年。戦後の復興を目的とした成果は後世に受け継がれてゆくだろう。そして、51年目を迎える2002年、次なる半世紀が始まる。60周年を迎える10年の日本JCの活躍に期待する。

\*第13章～第16章の記述は「50年史」より